

二部 合同討論集会 開かる

さらに恒常的な討論を

二十一日午後七時より、五号館一

階で学苑会主催による「全二部合同クラス討論会」が開催された。

この討論集会は、学苑会臨時学生大会で、代議員から二クラス末端の中教の活動の不十分さの批判と「合同討論会」要求に応えるものとしてあった。

儘管不足と冬休み前であり、五〇名に満たない集客状況ではあったが、学生大会より以上に討論が深化され、多くの学友にとっては「濃い存在であった」「中教の身近な討論で、素朴な疑問を投げかけた」。

「学費値上げ賛成」は広範なクラス討論の渦を巻き起こし、「授業料値上げ見送り」の新たな攻撃によって、「一定程度クラスは動揺をきたした」とうかがえた。しかし、当初からクラスの自立した単独交要求の独自の運動を展開してきた「555」が、その発言の分断感にも動揺せず恒常的に運動を自己存在を問う中から展開して行くクラスも見受けられた。

中教との討論の中では、「受験料値上げ阻止」の闘いを確認しつつも、その止揚の方向性で政治課題の問題は対立。とりわけ「この問題」は「二重線」などある学園闘争と明確・二重線などの政治課題との関連性もろくに明らかならん共有を打ち取れなかった。

今後、受験料値上げ阻止闘争を闘うにあたって、当然でも、88・89年の全共闘運動の経験の総括が迫られ、学園闘争—政治闘争を安易に一元化するのではなく、同時に反発、対立を認め、もたれ、相互性・連関性の闘いの深化が、今後の課題としてある。

この集会を機に、さらに合同クラス討論集会を恒常化、徹底化し